

## オーストラリアにおける多文化主義に基づく授業実践 — 価値教育の観点からの考察 —

長濱博文

九州女子大学人間科学部人間発達学科人間基礎学専攻

北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2011年5月31日受付、2011年7月15日受理)

### 要約

オーストラリアにおける価値教育の理念は、学校教育における確かな指針として近年提示されてきた。それは、オーストラリアの多文化主義を肯定する教育の進展とともに、公立、私立等の別なく、学校での教育内容とともに、児童・生徒への自己理解と社会的責任への教育が保護者や地域社会から期待されてきたからである。よって、オーストラリアの価値教育は、理念として提示されているが、教科目として時間割に加えることが必ずしも求められているものではない。しかし、その価値理念の提示は学校教育現場に変容を求めている。なぜなら、オーストラリアの多文化主義への明確な指針として機能しているからである。

本研究は、オーストラリアの価値教育の理念がどのように授業において実践されているかについて分析し、オーストラリアの多文化主義に基づく価値教育の位置づけを明らかにすることを目的とする。

### はじめに

オーストラリアの多文化教育の第一の特色は、語学教育に顕著に見出されてきた。それは、国民を形成する多数の移民の文化をどのように理解するかについて、オーストラリアの多文化主義に基づく授業実践の在り方を具体的に提示しているからである。多文化主義は、1970年代から白豪主義に代わる政策として導入された。多様な文化の尊重と同時に、公用語の英語と民主主義の理念が重視された。1980年代に入ると、移民を対象とした多文化主義が、すべてのオーストラリア人を対象とするものと解釈されるに至った。1982年には『すべてのオーストラリア人のための多文化主義』が宣言され、民族問題としての多文化主義は終焉したことが宣言されたのである<sup>1</sup>。この解釈はさらに進められ、多文化主義は(1) オーストラリア人全体を包括する、(2) 移民の社会参加の拡大から、国内の多様性の経済的活用の拡大、(3) 国家としての団結の継続的維持を特徴として示すに至っている。このオーストラリアの多文化主義では、国家における「統一性」と「多様性」の二つの理念が共生した状態で成り立っているとの分析が可能であろう<sup>2</sup>。このように国民国家形成のためには異文化への寛容あるいは尊重の理念が不可欠である点において、グローバル化の進む

日本における留学生の受け入れ状況等を考えあわせるならば、オーストラリアの政策から得られる知見は見過ごすことのできないものである。

しかし、この多民族共生のための教育の特色は、多文化教育だけではない。他にも、市民性（シティズンシップ）教育や先住民教育の特色が挙げられる<sup>3</sup>。市民性教育は、欧州における教育改革の影響を受けたものであり、先住民教育はオーストラリアの白豪主義を転換したことにより、先住民に関する教育を通して、オーストラリアという国家と、その国家が民主化と多文化化を推進していることを学ぶための文化内容である。

そして、現在、オーストラリアの学校教育において、上記の教育を通して教授すべき価値教育についての議論が推進されている。本稿においては、オーストラリアの多文化教育について、新しく提示されてきた価値教育の観点から、NSW（New South Wales, ニューサウスウェールズ）州シドニー（Sydney）での現地調査の授業実践を分析する。第1章において、価値教育の成立過程を概観し、第2章において、現地調査において授業観察した授業実践を分析する。そして、第3章において、オーストラリアの価値理念が示す多文化主義の現状と課題について考察する。

## 1. オーストラリアにおける価値教育導入の成立過程

オーストラリアにおける価値教育の導入は、市民性教育の高まりの中、オーストラリアの市民として求められる価値を具体化する必要があると教育政策に関与する各方面からの意見が出されたからである。オーストラリアにおける市民とは、国民の概念に対して批判、あるいは対峙するものではなく、同じ国家に集い、より良き市民になることが良き国民となる上で求められるステップであると判断されたからであると考えられる。

事実、1991年代初頭の国際的な調査において、家族や宗教が価値を保持するものであり、学校は価値中立的であることが最も教育機能を高めるとのこれまでの見解を覆す結果を示し、そのような信条にとらわれることの虚しさと、生徒の学業を含む全ての分野において教育効果を半減させる潜在性を指摘されたのである<sup>4</sup>。これを受けて、各州のオーストラリアの教育省は、独自にオーストラリア人であることを教授するための教育制度と教員養成の整備を実施し始め、政府もまた、その動きに合わせて調査を行い、1994年に「公民科専門家グループ（Civics Expert Group）レポート」のタイトルで提出された。このレポートが提出されたのも、委員長であったS. マッキンタイアーの意見が、多文化的な新しいナショナル・アイデンティティを求めるキーティング労働党政権に近かったからであると論じられた<sup>5</sup>。ここに、公民、市民性、価値教育に対する理解が変容してきたことが分かる。しかし、その過程においても、これまでにもみられた批判が出された。一つは、公的な学校は価値中立性を保つべきであるというものである。もう一つは、主観的で、結果として確認できない分野を担当することは、運営すべき学校の能力や立場を越えてしまうのではとの懐疑主義で

ある。事実、オーストラリアにおいても、公教育の安定した運営のためには、国家に基礎を置く学校は価値中立性の立場に立ち、教会に基礎を置く学校における宗教的信条を否定するものではないとの見解に立っていたが、それは、このある種プラグマティックな解釈が共通の目的観に立つものであるとの説得力を持っていたからである<sup>6</sup>。

例えば、1880年のNSW（ニューサウスウェールズ州）公教育法においては、法令の遵守や社会的倫理の形成における宗教的価値の役割に理解を示しながら、生徒に彼らの社会の価値を根づかせることの必要性を強調している<sup>7</sup>。ここでは、運営すべき学校の能力や立場が主観的であり、結果や成果として確認できない分野を担当することになるのではという懐疑の念が前提となっていた。

しかし、市民性教育の導入が進み、先住民教育も所与のものとして捉える多文化主義に基づく教育が政府の指針として提示される中で、公教育において教授される価値への対応は変容する。1993年6月に設立された、連邦及び各州の教育大臣によって構成される連邦政府レベルの全国教育雇用訓練青少年問題審議会（The Ministerial Council on Education, Employment, Training and Youth Affairs [MCEETYA]）はまた、特定の技術を持つ生徒を育てるだけでなく、人格を形成するものであることが教育であるという認識を示した。価値に基づく教育は、生徒の自尊心、楽観主義、自己実現への意欲を高め、生徒の倫理的判断と社会的責任の実践を助ける。生徒が自身と社会に対する責任を理解し、発達させることを保護者は学校に期待していると認識していた<sup>8</sup>。

さらに、1997年、ハワード保守連合政権下において、J.ハーストを委員長とする公民科教育グループ（Civics Education Group）が設置された。ハワードは、それまでの多文化主義的な論調を「黒い喪章をつけた歴史観」と批判し、オーストラリアの歴史は多数の集団によって構成される国の歴史ではなく、一つの国民の人道的で英雄的な歴史であると論じた。この歴史観に基づいて、「デモクラシーの発見（Discovering Democracy）」の教材開発がなされた。そこでは西欧の伝統的民主主義を受け継ぎ、現在は米国と並んで民主主義を体現しているとの歴史観が提示された<sup>9</sup>。これは、民主主義を学習する観点から、新たなナショナル・アイデンティティを教授することを目指したものであり、多文化主義に基づく教育とは一定の距離を持つ政策である。そして、このプロジェクト以後、価値教育は新たな政府の教育の方向性を提示している。

オーストラリアの価値教育は、ナショナル・フレームワーク（国家的枠組み）として提示されている。正式には、『オーストラリア学校教育における価値教育のためのナショナル・フレームワーク』と呼ばれるが、これは2003年の価値教育調査（Values Education Study）の結果とフレームワーク草案に関する広範囲の審議の中から導かれたものである<sup>10</sup>。

このフレームワークが提出されたことによって、オーストラリアにおける公立と私立の学校では既に価値教育の見過ごすことのできない歴史があり、オーストラリアの哲学、信条、

伝統を汲み上げていることが理解できる。このことは、全てのセクターの学校が、次世代における効果的な価値教育へのアプローチを発展させてきたことを示している<sup>11</sup>。

このフレームワークに含まれるものは、(1) コンテキスト (文脈)；学校における向上された価値教育のための土台をつくるビジョン (未来像、洞察力)；(2) 『21世紀における学校教育のための国家目標 (アデレード宣言、*National Goals for Schooling in the Twenty-First Century*, 1999)』を基礎とする価値群；(3) 価値教育の実施において諸学校を補助するための指針となる原則；価値教育を実施する諸学校への実用的な手引きを提供する主要な要素とアプローチである。この目標は、21世紀に向けた学校教育の指針として、1989年の教育目標が改定されたものである。その中では、生徒が道徳、倫理、社会的公正に関する事象において正しく判断し、責任を遂行する能力や、見識ある市民として、オーストラリアの政治制度や市民生活について正しく理解すること等が求められている<sup>12</sup>。

では、コンテキストとは何か。2002年7月19日における全国教育雇用訓練青少年問題審議会 (MCEFTYA) において、オーストラリアの諸学校における価値教育のためのフレームワークと諸原則の開発を目的として、政府によって委任された価値教育調査 (Values Education Study) が全面的に支持された。この諮問委員会の提示する価値教育のビジョンは、計画的、且つシステマティックな方法で行われることが目指されている。

つまり、学校のコミュニティ、学校の使命／エトスを考慮しながら、具体的に実践する。地域 (ローカル)、国家、そしてグローバルなコンテキストにおいて、責任ある生徒を育成し、生徒のレジリエンスと社会的スキルを発達させる。主要な学習分野を横断した学校の方針 (政策) や教育計画において、教授される価値が合致していることが求められている<sup>13</sup>。

以上のように、多文化主義に基づく様々な教育と、西欧民主主義の系譜から歴史を正当化する教育が、オーストラリアの教育を形成し、価値教育の成立を必然化させたのである。次に、この価値教育の実践について、現地調査に基づいて考察する。

## II. 授業観察に基づく価値教育の分析

### 1. インディペンデント・スクールにおける多文化教育:アボッツレイ・ハイスクールの事例

本調査に先駆けて訪問した、NSW州インディペンデント・スクール・オフィス (独立学校州教育事務所) において、担当官のジョー・マックリーン (Jo McLean, Acting Assistant Director: Professional Development) 氏と語学教育担当のメルル・ワヒリン (Merryl Wahilin, Education Consultant) 氏にインタビューした (2010年11月3日)。

このインタビューにおいて理解できたことは、オーストラリアの学校教育における多文化教育推進の為の価値教育の重要性である。オーストラリアの学校教育の特徴は、先述した語学教育の重視にあるが、一方では、異文化への寛容性、移民の祖国の精神性の保持、それらの上に成立する多民族国家としてのオーストラリアの国民性の形成が、語学教育と同時に価

値教育の共通の目的でもあることは明らかである。価値教育は、オーストラリアの学校教育のすべての教科目において教授され、学習効果を高めるための要素として提示されている。

その中で、多文化教育において、公立学校だけでなく、私立のインディペンデント・スクール、キリスト教系（カトリック）学校においても、共通した価値の教育が強調されている。加えて、少数ではあるがインディペンデント・スクールとして運営されているイスラーム教系学校においても、すべての教科目の中で価値教育がなされているとのことである。そして、価値の教授において選択される方法論及び教授法の選択、その教育に不可欠な価値の判断基準は、具体的には各学校と教師に裁量が委ねられている。これは、オーストラリアの学校教育における教育内容に関して、各学校に多くの裁量が委ねられていることを示すものであり、インディペンデント・スクールだけでなく、後述する公立学校においても見出される特徴であった。

この州教育事務所の訪問を受けて、翌日アボッツレイ・ハイスクール（Abbotsleigh School）を訪問する。シドニー郊外、電車で1時間程のウロンガ地区（Wahroonga, NSW）にあるこの学校は、女子校として、地域を代表する伝統と実績をもつ名門校であり、多くのオーストラリアを代表する大学に卒業生を送り出している。この学校の概要についてお話をお伺いできたのは、アブラハムス中等学校長（Rosemary Abrahams, Head of Senior School/ Deputy Headmistress）からであった。アブラハムス校長の話によると、この名門学校においても、多くの留学生を受け入れているとの話であるが、特に中国からの留学生が増えているとの話であった。この実質的な留学生の増加によって、また、オーストラリア国内における移民の第二位に中華系が入る現状もあり、これまで第二外国語として教授されてきた日本語に代わり、中国語が導入される予定になっているとのことであった。日本語担当教諭の話によると、日本語の第二外国語の授業は、3年後までに段階的に廃止されていくとのことであった。これは、多文化理解と多民族国家としての文化政策の一環として、早期の言語教育に重点を置いてきたオーストラリアにおける中国のプレゼンスが相対的に向上してきている証左であり、これまでも中華系移民が多かったにも関わらず、日本語の教授がなされてきた現状から、中国語への移行がみられるということは、オーストラリアの外交的なパワー・バランスの変容が、国内の言語教育にも影響を与えていると考えられる。

また、価値教育の授業を参観することができた。この授業は、情報教育と統合した授業であり、自分の価値選択の情報をコンピューターに入力していくことで、価値選択の傾向性を分析するというものであった。パソコン上に示される個々の質問に回答していくと、ある分野における回答者の価値選択の傾向性がグラフとして最後に提示される。これには、制作に携わった先生だけでなく、その他の先生方も加わっての授業がなされた。調査者も参加しての授業では、プログラムの使い方を中心としたものとなったが、自分の価値選択を客観的に理解する方法として、コンピューターを利用した価値教育も自己理解と他者理解を促す上で、

グラフ化などによる可視化できる情報教育との統合は、今後の価値教育において有効な方法論の一つであると考えられる。ただ、この情報教育との統合にはいくつかの留意点が存在する。

第一に、制作に携わった教員の方が言われていたが、まだコンピューターを用いた価値教育は始まったばかりであり、これから更に改良していく余地があることである。第二に、この情報教育において制作する価値プログラムの判断基準を誰がどのように設定するかである。価値教育の客観性を保持できるだけの制作グループによる審査、そして、その審査においても多くの有識者からの確かなコンセンサスを得た上での制作が求められよう。第三に、価値教育と情報教育の一環としてこれらを実践する場合、適切な環境の中での実施が求められることである。生徒にとっては、事前の十分な意識付けを伴わない形での実践となった場合、教師が期待する回答を生徒が意図的に選択し、生徒の精神的成長を促す価値教育の実践とならないことも否定的に考えれば想定できる。しかし、このような先駆的な取り組みが実施されていることは、価値教育が学校文化として期待されていることの証左と判断できる。

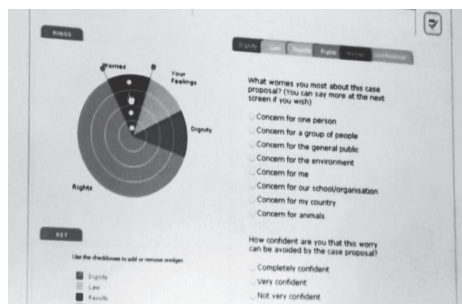


写真1, 写真2. 情報教育と統合した価値教育の授業 (Abbotsleigh School, NSW, AU, 2010/11/04)

## 2. インディペンデント・スクールにおける多文化教育：インターナショナル・グラマー・スクールの事例

インターナショナル・グラマー・スクール (International Grammar School) は、シドニーの鉄道の幹線経路の中心となるセントラル駅から徒歩10分程のところにある。そして、この独立学校も、多数の生徒が有名大学に進学する名門校である。このグラマー・スクールにおいても、初等教育と中等教育の一貫教育が実施されている。

今回の調査において、グラマー・スクールを紹介して下さったのは、英語教育を専門とする教員であるロザルバ氏 (Rosalba Genua-Petrovic, Languages Teacher) である。グラマー・スクールでは、特に初等教育段階での語学教育を中心に参観することができた。ドイツ語の授業では、当日がこれまでの学習成果の発表会として、父兄を招いての創作劇が行われた。ドイツ語でも非常にレベルの高いドイツ語での劇である。そして、劇に参加している

ほとんどの児童に台詞が割り当てられ、確かな発音と語彙力に裏打ちされた創作劇となった。内容は、村人と王を苦しめる魔物に対して、王と村人が協力して魔物を退治するというものである。完成度の高い劇に父兄からも盛んに拍手が送られていた。このような授業が、学校集会ではなく、通常の第二外国語の授業の一環として実践されていることは、語学教育を重視するカリキュラム上の特色を示すものである。

その次にフランス語の授業を参観した。この授業も初等教育段階の授業であったが、教える語彙も文法も、そして講義で用いる言語もフランス語であり、児童もそのレベルの高い授業に積極的に参加し、発言していた。また、日本語のクラスも参観する機会を得た。日本語のクラスには、日本人の子弟、あるいは日系人とみられる児童も在籍していた。教師は、基本的な日本語を用いながらも、すべての説明を日本語で行い、日本語のニュアンスによって理解を深めることを意図した授業がなされていた。この日は前回の授業で習った「これは、～です。」という基本文法を用いて、どのように応用できるかについて、体の部分を示す言葉を用いながら、教師の忍耐強い繰り返し練習の中で、次第に基本的な文法が児童の理解を深めていく様子を観察することができた。

その後、語学主任のロザルバ氏にインタビューを行った。氏によれば、観察できた授業の言語の他に、移民の多い、インドネシア語と中国語も選択できる第二言語としている旨の説明を受けた（インターナショナル・グラマー・スクールにおいては、児童の選択状況からその年度の言語コースを採用しているとのことであった）。

### 2-1. インターナショナル・グラマー・スクールの特色

ロザルバ氏へのインタビューにおいても話題となったが、グラマー・スクールの初等教育の教育目標として、様々な教育経験の機会を提供することが挙げられている。そして、言語、音楽、芸術（美術）、演劇（ドラマ）、英語、数学を含めた様々な表現の形態を通して、自己と世界への理解を発展させることが期待されている。特に、初等学校（Primary School）においては、運動（physical activity）を重視し、上級生になれば、競い合う活動も認められている。これらは、“全人的人間、あるいは全体人間”は、学術的、社会的、体力的に形成されるという学校教育のホリスティックなアプローチを確証するものである。

今回は観察する機会を得なかったが、中等教育レベルにおいても語学教育に力点を置いている点は共通している。しかも、中等教育段階では、第二外国語に加えて、第三外国語の授業も実践されている。第二外国語において、フランス語、日本語、ドイツ語、イタリア語のどれかを選択する。中等教育においては、初等教育を経ていない生徒のために初級レベルの語学力の段階の生徒にも対応している。この初級段階においては、より集中的なコースが設けられており、経過に応じて、次の段階のコースに移れるシステムとなっている。そして、すべてのレベルの学生が交換留学に参加する機会を持つ。特に、フランス、イタリア、スペ

イン、ドイツに関しては、教員が同行しない6週間のホームステイを含む交換留学のシステムを採用しており、教員が留学期間中に様子を確認するようになっている。日本と中国へは教員が同行しての学校訪問とホームステイが実施されている。

さらにユニークなシステムは、第三言語のプログラムである。中等教育に上がった生徒（7年生）全員が第三の言語（現在は中国語、あるいはスペイン語が加わる）を選択し、9、10年生からは選択となる。この語学学習は、全国学力テストにあわせて実施されている。このコースには、中国語やスペイン語だけでなく、必要があれば日本語も含まれる。上級レベルにある生徒に対しては、より高度な語学力が身に付くように指導されている<sup>14</sup>。



写真3, 写真4. 語学教育（ドイツ語と日本語）の授業の様子  
(International Grammar School, Sydney, NSW, AU, 2010/11/05)

## 2-2. グラマー・スクールのカリキュラム上の特色

グラマー・スクールの特色はカリキュラムに反映している。ステージ4 (Stage4, Years 7-8) においては、NSW州の義務教育に従い、英語、数学、科学、歴史、地理、音楽、美術、体育/保健、情報技術を必須教科目としている。そして、先述した第二言語をすべての生徒が履修する。ハイスクール・レベルのカリキュラムは、初等教育から中等教育へのスムーズな移行を重視したものであり、year 5-8 からの生徒のニーズに応じたものであり、よって、その年々によって、必要とされる教科目を加えたカリキュラム編成がなされることになる。

ステージ5 (Stage5, Years 9-10) においては、ステージ4までの必修教科を継続すると同時に、加えて、オーストラリア史、地理、公民と市民性教育、第二言語が要求される。

ステージ6 (Stage6, Years 11-12) においては、ステージ5のさらに上級レベルの授業が準備されているに加えて、第三言語の履修が特色と言える。そして、それぞれの教科目においてより高度な継続学習を認めていることも特色である。このグラマー・スクールにおいても、多文化教育を特徴づけるカリキュラムの内容となっている<sup>15</sup>。

これらの諸段階は、州が定める到達基準（スタンダード）に準拠したものであるが、そこからも、公民科教育、市民性教育への取り組み、オーストラリア史観の形成等のこれまでの多文化教育の変容が、基準として提示されていることが理解できる。このグラマー・スクー



ルのカリキュラム上の基礎となっている学校の提示する価値については、第三章において検討する。

### 3. 公立学校における多文化教育：ホールストン農業ハイスクールの事例

ホールストン農業ハイスクール (Hurlstone Agricultural High School) は、NSW州でも郊外に位置し、必ずしも都市部に連なる多文化化した学校の特色を示す学校ではない。しかし、ここも、白人の生徒だけでなく、アジア系の生徒も在籍する学校であった。前身が農業高校であったことで、広大な敷地を有しており (145ha)、実際に学校の敷地内で農業や家畜の飼育がなされているユニークな学校である。

しかし、このホールストンは、地域でも有数の進学校であり、遠方からの生徒のための寮も完備し、校長先生自身も敷地内の自宅に住み、寮生の監督にあっている。

このホールストン・ハイスクールにおいても授業を参観することができた。オーストラリアの地理 (Australian Geography) と商業科 (Commerce) の授業である。それらは、ともに10年生の科目で、学期の全15回の授業のうち、第4回目の授業であった。本稿ではより多文化教育の特色を示す地理の授業実践を取り上げる。授業のテーマは、「私たちのコミュニティにおける伝統的な問題」についてであった。教室は約40名の生徒すべてにコンピューターと無線ランの用意がなされており、生徒は教師のインストラクションに従いながら、自由に問題について検索できる学習環境が整備されていた。

#### 3-1. オーストラリアの地理の授業実践

教師は、準備した学習指導案 (授業計画) に従いながら段階的な問いを準備し、生徒自身が授業後に価値を獲得できるように促す。

第一に、現在オーストラリア社会において、伝統的なオーストラリア人は何人いるのだろうか？

第二に、伝統的なオーストラリア人の出生率と死亡率はどうなっているのか？

第三に、彼らのコミュニティの住居、教育、保健衛生、雇用に影響を与える諸問題とは何か？

第四に、地域のコミュニティはどうやって支援できるのか？

第五に、彼らの状況をより良くすることがきるだろうか？

これらは、オーストラリアの地理の授業であると同時に、これまでのオーストラリアの歴史を理解しなければ真実の理解を得ることができるとは言えない。その意味において、地理の授業ではあるが、多くの歴史認識と価値教育を潜在的に含んでいると言える。

授業の導入部分 (Introduction) においては、コミュニティ (地域社会) は人々を助けるためにどのようなサービスがなされているか。また、アボリジニーの人々の必要性について、

どれほどの人が気づいているかについて議論するように、教師が生徒を促す。この導入部分における、教師の積極的な発問により、授業の真意を導き出す手がかりとなる生徒の展開部における作業ができるように準備されていく。

展開部分 (Body) においては、教師がまず、当初発した質問について、生徒自身が無線 LAN を用いたパソコンでの調べ学習を行う。その際に、授業の最初に問いかけた 5 つの質問に対して、一つ一つ取り上げ、生徒の調べ学習が可能となるように誘導する。その間、教師は生徒がパソコンを正しく使用しているか、教師の用意した資料を用いて、適切な問題意識を持って、調べ学習に取り組んでいるか、机間指導を続けている。一定の机間指導を加えて、生徒自身が調べた 5 つの問題についての調べ学習のデータに基づいて、授業が当初提示されたテーマ (目標) を明らかにするために議論が進められる。

授業の結論部分 (Conclusion) においては、あくまで生徒の自発性を尊重する形式を取っており、対話形式ではあるが、教師も事前にそれぞれの問いに対するパワーポイントによる入念な準備をしており、一つ一つの問いに生徒が解答にたどり着くように指導するとともに、解説を加えていく。そして、生徒が検索したホームページと教師自身が準備したパワーポイントの資料を相互に引用しながら、生徒の視点からの分析を重視した授業展開となっていた。

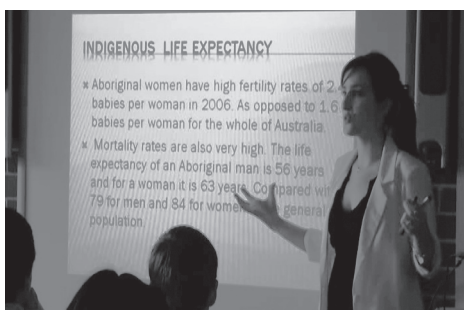


写真5, 写真6. オーストラリアの地理と商業科の授業の様子

(Hurlstone Agricultural High School, NSW, AU, 2010/11/07)

### III. オーストラリアにおける多文化教育と価値教育

これまで考察してきたオーストラリアの価値教育の実践では、次のような方法論を用いている<sup>16</sup>。第一に、各学校における教育計画への価値教育の導入、あるいは統合である。

第二に、学校と地域社会とのパートナーシップである。スクール・コミュニティ (地域社会) に関わり、その諸価値の文脈において、価値教育はオーストラリアの民主的な生活様式を保持し、共有される価値をつくる。価値教育プログラムの実施とモニターとして、各学校はスクール・コミュニティに関与する。

第三が、学校全体によるアプローチ（ホール・スクール・アプローチ）である。彼らのカリキュラム全体の内容、学校の構成（ストラクチャー）と政策、実施の方法と規則、資金の優先順位、政策決定に関する調整、学問の専門性に基づく手続き、コミュニティとの関係と福祉/事後的なケアのアプローチ法のそれぞれに対して、諸学校は価値教育の優先を適用する。そこでの求められるアプローチは、生徒の社会的で民主的なスキルを発達させるのを助け、生徒のレジリエンスと責任感をつくることを助け、価値教育のための安全で支援のある環境を確認するために、学級の中とそれらを越えて、肯定的な環境を諸学校が提供する。生徒とスタッフである教職員、そして両親は、彼ら自身の価値を探求することが奨励される。優良な実践に基づく教育学は価値教育に反映され、学習者にとっての適切な時期において、カリキュラムに導入される<sup>17</sup>。

第四は、安全で支援のある学習環境である。

第五に生徒への支援である。肯定的な学校文化に参加し、彼らの地域、国家、国際的な責務を発展させるために、生徒への権利付与するプログラムとストラテジー（戦略）を生徒が開発することができる。つまり、生徒の社会的スキルやレジリエンスを高めるために、諸学校は価値教育を用いる。このことは、振る舞い方の自己管理（マネジメント）や規律、暴力やいじめ、継続的な虐待やその他の危険性のある行為、干渉や阻害感、生徒の健康や健全さ、向上された人間関係や生徒の個人的な達成といった課題を含んでいる。

第六は質の高い教授（Quality teaching）である。教師は価値教育の正しい実践のためにスキルを磨くことが期待される。カリキュラムのすべての分野と学校での生活全体における価値を通して、教師の役割を支援するために、そして、継続的な効果を審査するために、適切な資源が教師に提供される<sup>18</sup>。

## 1. オーストラリアの多文化教育で教授される価値

このように、価値はすべての主要な学習分野に関連し、統合されている。このような「主要な要素とアプローチ」として提示されている内容は、価値教育の目標（Vision）を反映したものである。この目標では、9つの価値がナショナル・フレームワークのための価値として選択されている。それらは、オーストラリアのスクール・コミュニティ、及び先述の『21世紀における学校教育のための国家目標（1999年）』から現出してきたものである。それら9つの価値は次のものである。

1. Care and Compassion（ケアと同情心）自身と他者のためのケア、2. Doing Your Best（全力をつくす）価値があり、称賛に値することを達成することを探し出し、粘り強く努力し、卓越性を追求する、3. Fair Go（公平に行う）公正な社会のためにすべての人々が公平に扱われる共通の善（徳）を追求し、保護すること、4. Freedom（自由）不必要な干渉や妨害から自由なオーストラリア市民の権利と特権に恵まれ、そして他者の権利のた

めに立ち上がること、5. Honesty and Trustworthiness (誠実さと信頼) 誠実、正直であり、そして、真実を求めること、6. Integrity (高潔さ、清廉) モラルと倫理的品行の原則に則った行為をなし、言行一致を確かなものにする、7. Respect (尊重) 思慮と好意を持って他者に接し、他者の考えを尊重すること、8. Responsibility (責任) 自らの行動に責任を持ち、建設的で、非暴力的、平和的な方法を用いて問題を解決し、社会と市民生活に貢献し、その環境 (に注意を配ること) を保全すること、9. Understanding, Tolerance and Inclusion (理解、寛容、インクルージョン [包括]) 他者と他者の文化に意識を持ち、他者に含まれていた、そして他者を含む民主社会の中での多様性を受け入れることである。

このように、多文化教育において、市民性教育、先住民教育との連携を容易にし、具体的な教育内容を提示するために、価値教育が新たに加わってきていることが理解できる。それは、方法論を間違えば、学校の教育力の低下だけでなく、国民意識の低下をも招く可能性のある多文化教育において、多様性の中の統一を目指す国家としての国民形成のために、国民に求められる価値を明示したものである。

## 2. インターナショナル・グラマー・スクールの掲げる価値教育

また、教育省の提示した価値が各学校でどのように解釈されているかの事例として、インターナショナル・グラマー・スクールを取り上げる。同校では、独自のコア・バリュー (Core Values, 中心的価値) とそれら中心的価値に基づいた諸価値の教育が提示されている<sup>20</sup>。

中心的価値は、1. 多様性 (Diversity)、2. 個人の目標達成 (Personal Achievement)、3. 関係性 (Connectedness)、4. 伝統性 (Authenticity)、5. 活気 (Vibrancy) である。そして、それぞれの価値は次のような諸価値を内包する。

1. 多様性 (Diversity); a. 内包性 (Inclusiveness); b. 多様性と差異の賞賛 (Celebration of diversity and differences); c. 国際社会との連携 (Global connections); d. 差異の受容と容認 (Accepting and embracing of differences)

この価値を第一に挙げるのは、学校生活を終える時点において、どうしてもこの価値を獲得してほしいとの意図からであるとの説明が付されている。多様性と多文化的な理解を通して、グローバルなパースペクティブを獲得できるからであり、オーストラリアの自身のコミュニティに自尊心を持つことができるからである。

2. 個人の目標の達成 (Personal Achievement); a. 成功と成功に対する報酬 (Success and reward for success); b. 疑問を持つこと (Questioning); c. 開明性 (Extending); d. 肯定的な意見に意識を集中すること; e. 関心 (Curiosity); f. 肯定性 (Affirmation); g. 革新的な計画 (Innovative programs); h. 個人のニーズを満たすこと (Meeting individual

needs); i. 果敢なる挑戦 (Evolving challenges); j. 機会の範囲 (Range of opportunities); k. 学習への意欲 (Passion for learning); l. 創造性 (Creativity); m. 寛容性と貢献 (Generosity and contribution)

質の高い教育が教師と学習者には求められる。よって、グラマー・スクールでは、幅広いカリキュラムと協働によるプログラムにより、チャレンジングともとれる学習経験が計画されている。このことによって、上記の価値の獲得が可能となり、また、そのために人間性と共感 (empathy) に基づいて” (社会に) 貢献しよう”との意識が要求される。

3. 関連性 (Connectedness); a. Community (地域社会); b. Family (家族); c. Student care (生徒へのケア); d. Team (チーム); e. Friendly (友好的であること); f. Warmth (人間的温かさ); g. Supportive (協力的であること); h. Closeness (親密さ)

学校において、すべての生徒が安全で安心して授業に参加できるためには、上記の価値が求められる。それは、すべての生徒が迎え入れられ、受け入れられていると感じられることが必要だからである。そして、彼らが安心して他者と関わりを持っていると実感できる時に、生徒は成長することができる。よって、すべての生徒がホームクラス (Home class) あるいはチューターグループ (Tutor Group) の一員となる。学校はかけ離れたものではなく、スタッフの教職員、両親、生徒が生徒の学習に関与する、学習力のあるコミュニティである。よって、生徒の積極的関与が健全な生活習慣を促進し、生徒は共有し、協力し、共に働くことが奨励される。

4. 伝統性 (Authenticity); a. 個人的責任 (Personal responsibility); b. 自身と他者への尊敬 (Respect for self and others); c. 誠実さ (Integrity); d. 有益な知識を与える (Informative); e. 開放性 (Openness); f. 質の高い人間関係 (Quality relationships); g. 伝達可能な行動 (Transparent actions); h. 倫理的な振る舞い (Ethical behaviours); i. 信頼 (Trust); j. 正直さ (Trust); k. Treating others with dignity (尊厳をもって他者に接すること) これらも、生徒の自己責任を涵養するために求められる諸価値を提示したものである。

5. 活気 (Vibrancy); a. 違い (Different); b. 形式ばらない (Informal); c. 地に足のついた (Ground breaking); d. 賑やかな (Buzzy); e. 質の追求 (Pursuing quality); f. 元気のある (Energetic); g. 彩りのある (Colourful); h. 現代的な (Contemporary); i. ユニークさ (Uniqueness); j. 楽しさ (Fun); k. 幸せな (Happy); l. 新しい方法 (New ways); m. 革新的な (Innovative) 学校の中に一旦入ったならば、その活気に気づくといった、賑やかで元気のある、そして、現代的でグローバルなコミュニティを形成していることに自信が持てることが期待される。

このように提示された、学校独自の価値は、学校の教育目標を明らかにし、高い理念に基づいた教育を行おうとの姿勢を明確に提示したものと考えられる。しかし、これらは、必ず

しも教育省が提示する価値教育の理念を否定するものではなく、多くはそれらに統合されるものであり、視点を変えれば、教育省が提示した価値をより詳細に提示したものと解釈できる。このインターナショナル・グラマー・スクールの価値から理解できることは、国際都市シドニーの多元的な価値とそれを構成する多文化を肯定して、学校の特色として提示するとともに、既存のコミュニティのもつ教育力についても、その国際社会の縮図となっている学校の力量形成の上から、これまで以上の連携が必要と考えられている点に特色を見いだすことができる。

学校の目標として諸価値が提示されているが、具体的な価値教育のプロジェクトとして、どれだけ推進されるかを評価することは難しい。語学教育の特色だけでも、上記の価値のいくつかを検証できる実践と考えられるが、価値教育が諸教科目に、または学校全体のカリキュラムに統合されていることを考えた場合、その評価には一定の期間と客観的な評価機関によるアセスメントも必要になってくると考えられる。

#### IV. 新たな市民性とアイデンティティの創出を目指す試み

今一度、語学教育の観点から考察した場合、グラマー・スクールの語学教育は、価値教育においても提示されているように、移民の文化を受容し、国家が多くの移民の文化から成り立っていることを肯定している。そして、移民の文化がオーストラリア社会に良い影響を与えるものと政府、州政府、教育機関が考えていることが理解できる。

同時に、この早期の第二言語教育は、オーストラリアで生まれ、育った子弟に対しても必須の教科となっているが、それは第二言語習得の難しさを理解することにより、言語的に不利な状況にある移民に対する偏見を克服し、言語的な理解のレベルでの社会的差別の形成（これは目に見えないレベルの差別を含むものと考えられる）を自我の形成過程の初期段階において克服する目的があるとロザルバ氏へのインタビューからも理解できた。それは、主要な交通機関の中継点であるセントラル駅においてさえ、必ずしも英語を母語としない職員を窓口を採用していることから理解できる。また、今回は学期末の最も多忙な時期での調査となり、実現することができなかったが、インディペンデント・スクールの中にはイスラーム系学校も複数存在し、マドラサ（伝統的イスラーム学校）とは異なり、オーストラリアの学校教育制度に準じながら、伝統的なイスラームに基づいた価値教育を含む学校教育を構築していることも指摘できる。このような社会状況も、オーストラリアの学校教育における多文化教育、それを基礎とした価値教育が、言語教育政策、市民性教育政策、地域社会との連携教育といった具体的な政策として実施され、社会的認知を受け、学校—家庭—地域社会との連携が強化され、結実しつつある証左であると考えられる。この多文化教育には、例えば米国における移民受け入れ政策後の混乱や、インドネシアのスハルト退陣時の社会混乱において、中華系の人々が暴徒の被害にあったように、容易に社会不信を招く連携関係でも

ある。オーストラリアにおける価値教育の実践は、たとえ非常事態においても、社会的弱者を排斥したり、特定の民族・宗教をもつ人々が被害を被るような状況をつくらないように、教育や社会政策においても常に配慮がなされることが求められる。

また、価値教育の提示は、それまでのオーストラリアにおける多文化主義と多文化教育が変容してきていることも示唆するものである。そこでは、差異の克服を目指す多文化・多民族国家において、その差異の概念によって本質的に生じる矛盾の現出が指摘される。批判的リテラシーの観点からオーストラリアと米国の多文化教育を研究する竹川は、両国における多文化教育の相関する論点について、公用語である英語を第一言語としない移民や先住民の存在により、彼らが形成する社会階層において、学校教育の教育内容や、排除されている文化や価値の問題に強い社会的関心が払われてきたことを挙げる。また、多文化教育の目的がマイノリティ文化の承認によるエンパワメントに向けられる一方で、特定の文化を従属的な位置づけとした、既存社会に対する批判的視点の欠如があることを挙げる。さらに、それらの根底には、自文化と他文化、マジョリティとマイノリティの文化といった図式を肯定し、「自己のアイデンティティ」の承認や「他者のアイデンティティ」の尊重を唱える本質的前提となる考え方が存在すると指摘する。この前提は社会的差異を社会的関係や文脈とは関係なく定義するものである<sup>21</sup>。

そして、現在、単一民族主義的な排他的国家概念の是認でも、あるいはナショナル・アイデンティティそのものの単なる否定でもない、アイデンティティの多様性を包摂する概念としてのナショナル・アイデンティティの再検討の必要性も求められていると考えられる<sup>22</sup>。英国においては、包摂的なナショナル・アイデンティティの在り方が論じられており、コスモ・ナショナリズムとリベラル・ナショナリズムの観点から分析されている。コスモ・ナショナリズムでは、コスモポリタニズムの基礎となる普遍的価値について、人類共通の価値である人権概念と国家的な帰属が対立しないことを前提にして、人権に則した教育の在り方が提示されていると分析する。一方、リベラル・ナショナリズムにおいては、国民の同質性に訴え排他的な一体感を創出するエスノ・ナショナリズムとは異なり、国家内部の文化的多様性を包摂する概念と考えられる<sup>23</sup>。この前者の特質は、英国の影響を受けてきたオーストラリアにおいて、また後者においては、国民国家の再生を目指す国家、例えばフィリピン等において示唆的である。

民主主義教育以降、オーストラリアの市民性教育には、3つの方向性がみられる。一つは、オーストラリアの歴史に関するプロジェクト、もう一つは、公民・市民性教育に関するプログラム、そして価値教育である。公民・市民性教育においては、歴史重視の教育にとどまらない、総合的なアプローチがとられるようになってきている<sup>24</sup>。このように、最終的に価値教育が提示されたことは、オーストラリア社会の基底部分において、コンセンサスを持ちうる概念が不可欠と考えられるに至ったからである。

それぞれの国家における価値教育では、普遍的価値への対応も異なる。多様性を基本とする学校教育を行うオーストラリアでは、ユネスコの価値は所与のものであり、それらの上に国民性の価値を築くことが求められている。このことを考えた場合、ユネスコの価値の教授は、国家の国内状況を反映するものであり、同時に、国際社会との関わり方を表出するものとなっている。それは、国際社会のグローバル化の進展によって、これまで個人（市民）に求められたパーソナル・アイデンティティとナショナル・アイデンティティとの整合性が、リージョナル、あるいはグローバル・アイデンティティとの距離感によって影響、形成されるようになってきたことを示している。市民性概念の多様化が反映するものは、国民性、あるいは国民意識の多様化であり、それを肯定するグローバルな社会状況の変容である。オーストラリアにおける市民性とのバランスをとる教育は、新たな国民性の発展を目指す日本をはじめとする諸国家にとって示唆に富むものであり、その成果が期待される。

※本研究は、平成19-22年度文部科学省科学研究費基盤研究（C）〔研究代表者 竹熊尚夫准教授〕「多民族社会における教育の国際化の進展に関する国際比較研究」の研究分担の成果に基づいている。また、NSW州インディペンデント・スクール・オフィス、シドニー大学アドミッションズ・オフィス、シドニー工科大学アドミッションズ・オフィス、アボッツレイ・ハイスクール、インターナショナル・グラマー・スクール、ホールストン農業ハイスクール、シドニー日本人学校の諸先生方の御協力なしには現地調査の成果は得られなかった。ここに特記して深く謝意を表すものである。

<sup>1</sup> 伊井義人「オーストラリアの教育改革」佐藤博志編『オーストラリア教育改革に学ぶ— 学校変革プランの方法と実際—』、学文社、2007年、55-56頁。

<sup>2</sup> 同上、56頁。

<sup>3</sup> 同上、55-63頁。

<sup>4</sup> Lovat, Terry & Toomey, Ron (Ed.), *Values Education and Quality Teaching: The Double Helix Effect*, NSW, Australia: Springer, 2009, p.xi.

<sup>5</sup> 見世千賀子「オーストラリアにおけるシティズンシップ教育政策の展開」研究代表者嶺井明子『価値多元化社会におけるシティズンシップ教育の構築に関する国際的比較研究』平成17-19年度科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書、2008年3月、98-99頁。

<sup>6</sup> Lovat, Terry & Toomey, Ron (Ed.), p.xii.

<sup>7</sup> *Ibid.*, p.xii.

<sup>8</sup> Department of Education, Science and Training, Australian Government, *National*



*Framework For Values Education in Australian School*, Commonwealth of Australia 2005, p.1. /見世千賀子、99頁。

- <sup>9</sup> “Discovering Democracy in Action: Implementing the Program, Written by teachers from the Grants to Schools Program 2001-2003”, Student Learning Division, Office of Learning and Teaching, Department of Education & Training, Melbourne, Victoria 2004.

<http://www.eduweb.vic.gov.au/edulibrary/public/teachlearn/student/discoveringdemocracy.pdf#search='Discovering Democracy'> [2010/12/12] / 見世千賀子、96-98頁。

- <sup>10</sup> Department of Education, Science and Training, Australian Government, p.1.

<sup>11</sup> *Ibid.*, p.1.

- <sup>12</sup> 見世千賀子、99頁。

- <sup>13</sup> Department of Education, Science and Training, Australian Government, p.1-3. 2009年7月には、オーストラリア政府諮問委員会 (The Council of Australian Governments (COAG)) の承認を得て、全国教育、早期発達及び青少年問題審議会 (The Ministerial Council for Education, Early Childhood Development and Youth Affairs [MCEECDYA]) が設立された。これは、既存の二つの組織、MCEETYAと全国職業技術訓練教育審議会 (The Ministerial Council for Vocational and Technical Education [MCVTE]) の役割と責任の再調整を認めたものであるが、結果として、MCEECDYAと全国専門教育雇用問題審議会 (The Ministerial Council for Tertiary Education and Employment [MCTEE]) の二つの諮問委員会に再構成されている。

- <sup>14</sup> Mrs. Rosalba Genua-Petrovic, Languages Teacher, International Grammar School へのインタビューによる。(2010年11月5日)

- <sup>15</sup> “International Grammar School, Our School, Bilingualism”

[http://www.igssyd.nsw.edu.au/newsite3/our\\_school/bilingualism.php](http://www.igssyd.nsw.edu.au/newsite3/our_school/bilingualism.php) [2010/12/12]

- <sup>16</sup> Department of Education, Science and Training, Australian Government, p.6.

<sup>17</sup> *Ibid.*, pp.6-7.

<sup>18</sup> *Ibid.*, pp.6-7.

- <sup>19</sup> Department of Education, Science and Training, Australian Government, pp.3-4.

- <sup>20</sup> “International Grammar School, Our School, Core Values”

[http://www.igssyd.nsw.edu.au/newsite3/our\\_school/school\\_goals.php](http://www.igssyd.nsw.edu.au/newsite3/our_school/school_goals.php) [2010/12/12]

- <sup>21</sup> 竹川慎哉 『批判的リテラシーの教育—オーストラリア・アメリカにおける現実と課題』、

明石書店、2010年、9-10頁。

<sup>22</sup> 北山夕華「シティズンシップ教育における包摂的ナショナル・アイデンティティの検討」日本国際理解教育学会編『国際理解教育』No.17,2011.06、明石書店、87頁。

<sup>23</sup> 同上、87頁。

<sup>24</sup> 見世千賀子、97-8頁。

## **“The New Trend of the Australian Multi-Cultural Education: An Analysis of Integrating Values Education in Curriculum”**

Hirofumi NAGAHAMA

Department of Education and Psychology, Faculty of Humanities,

Kyushu Women's University

1-1 Jiyugaoka, Yahatanisi-ku, Kitakyushu City, 807-8586, Fukuoka, Japan

### Abstract

Values Education, internationally known as Moral Education, Character Education and Ethics Education, are influencing multi-cultural education in Australia as well as in other countries.

Early foreign language education, citizenship education, aborigines education have characterized Australian schooling. New, however, Values Education is becoming highly evaluated as having an educational function of making relevance among those educational efforts. For this reason, Values Education's effects are said to have the double helix effect of enhancing quality teaching and improving values.

In this paper, the research is based on the class observations in Sydney, New South Wales, Australia, in November 2010. These are mainly Abbotsleigh School, International Grammar School, and Hourstone Agricultural High School. The class observations gave insight into how values were integrated and taught in many subjects while teaching multiculturalism and new Australian citizenship.

**Keywords :** Australian multi-cultural education, values education, value-integration, citizenship education, class-inspections